

## 「資料館の現状」

### ―神戸女学院史料室の場合―

若 山 晴 子

神戸女学院は一八七五年十月十二日に女子のための寄宿学校として正式開校いたしました。十月十二日ですから、わたくし共はこの会場を去って間もなく学院の創立百十八年目に際会することになります。一九七五年に創立百周年を迎え、その翌年に『神戸女学院百年史 総説』を、またその五年後に『神戸女学院百年史 各論』を出版するにあたり、そのための史料整備と出版業務に携わったのが、わたくし共の仕事の始まりでした。その後、この時の仕事の間どり方に鑑みて、折角集められた史料を散佚させるのはもったいないことであり、今後何年先のことになるかはわからないながら次の記念誌刊行の事業をもっとたやすく一層充実したものとするために、ここで使われた史料を整理保存し、かつ今後入手し得るであろう史料類の収集整備を考慮して：ということ、史料室の温存が決まりました。この種の仕事をする所は、ひとたび記念誌が出来るとそこで解散というケースも少なくないといわれ、わたくし共は幸運であったと言わべきでしょう。もともと：先にお送りいただきましたこの研究会の日程表によりますと、これは仮題ながら、「資料館の現状」についてお話せよとのことでしたが、その時お断りいたしましたように、わたくし共のところは規模も設備も「館」と言えるほどのものではなく、また扱っておりますものもあくまでも「文書史料」つまり Archives と称せられる類のものに限られており、それ故にその名称も「史料室」ということで通している次第です。そしてこれは、およそ十年ばかり前から、かつては宣教師館であった小さな木造二階建のたてものを殆ど占拠した形になっており、この意味では「館」であり（実際「グリーンウッド館」と呼ばれています）、雰囲気も悪くはありませんが、何分にも住宅として建てられたものですから、仕事場としてはあまり勝

手のよいものではなく、そしてとりわけ大切な史料類の保管場所としてはおよそ望ましいものではありません。防湿・耐火のことも考慮に入れ、ゆくゆくはせめて史料の保管場所の安全なものを……と学院当局に要請している状態です。このような、多分かなり特異な小さな所の例が、「資料館」の在り方を考える上で何かのお役に立つものかどうか分かりませんが、御指名いただきましたので、紹介させていただきます。

この史料室は、神戸女学院という、中学・高校・大学をまとめた学院の機構の中で、院長管轄下の部署の一つとして運営され、学院の予算でまかなわれています。そしてこれはまずわたくし共の史料室の特異性の一つになるかと思いますが、この研究会が東西共に「大学史」をその名称に組み込み、またこのたびも、ひたすらこれを主題として論義を重ねておいでのことを考えますと、わたくしはどうもとまどいを感じてしまいます。神戸女学院は大学をもつて始まったものでもなければ、また、関西の伝統ある女子校としての名声も偏えに大学だけのものと言いついてしまえるわけのものでもない——と思わざるを得ないところがありますから、この学校の歴史——故事来歴をかえりみる際には、単に「大学」だけのことを云々して済むことではなく、なってしまうのではないかと……。

しかも、院長直轄のこの史料室、制度上は法人の部の扱いですが、仕事の内容には研究活動に近いものがある上に専従者が大学の教員であることから、人事に関する庶務は大学に帰属し、なおその一方、この運営には院長の委嘱を受けた委員会があたります。その委員会の構成は、まず実務に関する専門委員会に、チャブレン室、図書館、中高部教員、大学教員から各一名、それに史料室長と史料室専従者。それからこの委員会の承認機関としての運営委員会に、上述の人々に加えて、院長、学院チャブレン、総務部長、経理部長、学長、中高部長、図書館事務長を加える——という、中・高・大・法人を包括する全学院規模のものになります。直接に史料室そのものの実務に携わる者といえは、現在は、室長が大学教授の兼任、専従者は大学助手、それに嘱託職員一名、アルバイト職員二名となっております。

さてそこで、この史料室の仕事ぶりは——と申しますと、すでに述べました Archives の性格の強いこと、単に大学だけのための部署ではないこと——という特性に加えて、図書館との業務上の分担及び協力の仕方から大きな影響を受けることになります。神戸女学院の図書館の歴史は古く、これが、当史料室発足以前の学院史関係のことの全てを取りしきってまいりました。史料室の方は百年史

を契機にして、その執筆者たる先生方のために史料をとりまとめるお手伝いという形で始めましたので、それ以前の学院史はもとより、それ以後も百年史と並行して出されることになる別の記念誌―写真集や研究誌の類―は、殆ど図書館の盡力に与ったものです。そして当然、ここで使われた史料類(写真や古文書のある程度まとめたもの)は従来図書館のものであり、今もそうですから、これらに関しては史料室はむしろ利用者の一人にすぎず、閲覧以上の権限を持ちません。このことは、先述のとおり適切な保管所を持たない身としてはむしろ有難いことではありますが、その一方、このことは、昨日来伺っております『最近の『資料館』の動向の意味深い傾向』という「資料の公開・展示」に価するものを、わたくし共の史料室はおよそ持っていないということでもあります。そこで、「資料の公開」ということに類する当史料室のアプローチは、図書館におさまっているこのような史料類を他の利用者方にとって使い勝手のよいものにするという目的に叶った作業に徹する―ということになりました。つまり、諸史料の目録・索引作り、解題、翻訳と註記(これは神戸女学院がアメリカの伝道会によって建てられた学校なもので、英文史料が非常に多いことにより)、あるいは、共同研究や稀覯書の覆刻等のための史料探しとこれに基づく編集…などを手がけております。またこのような経験を重ねて、学院内外の様々な照会・問い合わせに応えることも多くなりました。

この種の仕事の成果の一端は、当史料室の年刊機関誌『学院史料』に発表してきました。米国伝道会宣教師文書の訳・註・解題、明治二十三年創刊の同窓会誌『めぐみ』の人名索引作りがそれですが、この『学院史料』は、全国のキリスト教系の学校と、様々な御縁でおつきあいの始まりました各地の学校や研究者の方々にお届けさせていただいて今年で一号となりますから、すでにお目にとまっていることかと存じます。

この宣教師文書は、神戸女学院と同志社を創立し、梅花学園の創立に参画したアメリカの外国宣教師団体の、世界各地の伝道の現場と米国はボストン本部との交信の記録で、殆ど手書き。これをマイクロフィルム・コピーにした膨大な史料の入手が可能となりましたので、最近、同志社大学人文科学研究所の共同研究にも加えていただいて、分担で、解説と活字化、内容のまとめや検討を進めております。個人の筆蹟のくせや、百年の歳月を経たインクのかすれや紙の傷み、マイクロ化した際の撮影上の制約、等々をおして文面を判読することは、さながらパズルか、芸術作品の修復作業の如くですが、幸いにも当史料室は代々、言ってみれば「もの好きな」

若手職員の方々に恵まれて、楽しくやってまいりました。

ほかには、未発表かつ未完成ではありますが、やはり図書館所蔵のキリスト教関係の古い書物や新聞雑誌の索引作りも心がけて、内外の照会になるべく答えやすいようにと準備中です。但しこのような索引関係の仕事は、ゆくゆくはコンピューターに分担してもらおうということで、機械を入れて検討を始めました。

学院内の公文書類、理事会や常務委員会等の議事録、総務・経理関係の記録、等々は、現在各担当部署が持っています。史料室に保管場所が備わった昨年には、史料公開の時効にかかったものを順次引きとって史料として整備するつもりですが、部署と人によって、古いものがたまりにたまっては邪魔になると、あっさり捨てたがる場合もありますので、そういう時には是非史料室に御一報を……との依頼状をまわすことになりました。すでに届けられた学内印刷物類は一枚ずつ透明のポリ袋をファイルした中に入れ、目録を作りましたが、何分にもふさわしい収納場所がありませんので、仕事場のステイルの棚に積み上げてあります。古びて黄ばみ、パリパリと欠け落ちてゆく紙もありますから、これもまた、器用さと丹念さと忍耐力を備えた人材の要求される所以です。

これと並行して、学院内の現今の一般配布物から項目リストや人名録などをコンスタントに作ってゆく仕事もありますが、これもいずれはコンピューターに委ねられることでしょう。

史料の収集ということでは、なお、学生・生徒・同窓生にも協力を願いたいわけですが、なかなか思うにまかせません。もともと同窓会は――神戸女学院の同窓会はこれまた全く驚異的に行き届いた組織で、昨年創立百周年を迎えました。おおよそ二万を超える会員の消息を整備し、毎年これに、例の『めぐみ』の末裔になる同名の会誌を送り続け、同窓生もまたこれに応えて、消息、情報、記念物などを送ったり譲ったりしておりますので、史料室はしばしば情報源としてこれに頼り、またそのおこぼれに与ることも少なくありません。なお、このような筋金入りの同窓生のオラル・ヒストリーというものも考慮に入れるべきか――という考えも出ておりますが、これは諸般の事情から、史料室の仕事としては未着手の状態です。

史料の分類・保管という分野では、すでに充分お察しいただけたことと思いますが、わたくし共の史料室はおよそ劣等の部に属し、系統立った組織的活動が殆ど出来ておりません。その一番の口実は、貴重な史料を安全に保管する場所がないということ。そして第

二の口実は人手不足。現在常任の職員がおりませんので、とかく目先の仕事にかまけがちで、当面の史料を整理するところまでは個々の有能さで対処できますが、広い視野で長い目で状況を把握するということには行き届かず、なかなか包括的プランが立ちません。また実務の上でも、史料の閲覧や貸し出しのために人手をさく余裕は皆無と言わなければなりません。

…と言うことで、現在のわたくし共の仕事の中心的活動は、史料の整備と、そうして整備された史料の他者への提供という領域のこととなっています。史料提供の相手先は学院の内外を問いませんが、神戸女学院が日本では有数の、古い、女子のための学校であるということ、学院外では、教育関係の研究者―教育全般、女子高等教育、英語、音楽、カリキュラムのことに関心のある方々から、また、多数の同窓生が社会の、世界の、あちこちで活躍しているために、この人々と関わりのある人物や事業についての情報をとめる方々から、様々な照会が相つぎ、最近はまだ、テレビや雑誌の特集のために―という申し入れもかなりありました。これにひきかえ学院内部では、たまに、何かの年月日の確認や、旧教職員の在職期間の問い合わせなどがあるくらいで、めざましい活躍というには程遠いものがありました。しかしながらごく最近、英語教育に関する論文や、明治初期の讃美歌の研究が陽の目を見、このような折りに、日頃整備していた史料が活用されたり、時に進んでこれらの史料に基づいての協力執筆や原稿のチェック、校正にも関与するなどの機会を与えられ、いつにない活況を呈しました。

「神戸女学院史料室規程」には史料室のなすべき業務及び事業として、「(一)学院に関する文書史料の収集、整理、保管。(二)学院史全般に関する情報の提供。(三)『学院史料』等、学院史に関する印刷物の刊行。(四)その他学院の歴史に対する関心を高めるための諸事業。」が挙げられています。創立百周年はすでに過去のこととなったとは言え、当面次の記念誌刊行計画は出ておりません。しかしながら学問と教育の分野での学院の位置の認識を新たにすると共に、立学の精神を守り伝える據り処として、いつも有用な部署であり続けてほしいと願い、今後はまた(四)にあたる活動についても積極的に取り組んでみたいと考えております。